◇【お盆を迎える心構え】

今月はいよいよ八月です。別名を『葉月（はづき）』と申しますが、葉が紅葉して落ちる月『葉落（はおち月』から『葉月』と言われる様です。しかし、葉が落ちるのは秋では？と思われるかもしれませんが、旧暦で八月は秋なのです。

ところで『八月』と言われて人それぞれ連想するものは違うと思いますが、「夏休み・海水浴・旅行・花火・浴衣・すだれ・藤枕・風鈴・かき氷・夏祭り・帰省・盆踊り・麦茶・扇子・ビール・そうめん・蝉・日傘・打ち水・・・等々」数え上げればキリが無いくらいの風物詩が思い起こされますよね。

しかし何と言っても『八月＝お盆』と連想したいものです。

お盆を迎えるに当たって私達の心構えとしては、「今日の自分があるのは全てご先祖様のお陰様である」という先祖崇拝の心を、感謝の念をもって改めて心得る、と解釈しておれば間違いないと思います。

日本古来の農耕儀礼と、祖霊祭祀などが融合して伝えられてきた日本のお盆。親族が一堂に会し、先祖や故人を偲び、今日ある自分を省みるという、お盆の根幹をなす理念は、千古の昔から変わらないものです。

★【藪入り（やぶいり）】

江戸時代、お正月と、お盆には奉公人が休みを取って実家に帰る事が出来る時期で、これを「**藪入り**」と称しました。当時は仕事を見習う為に、職人・商人ともに、十三，四歳頃から師匠や商家を選んで丁稚奉公に出る習わしがあった様です。丁稚達は例年、正月の藪入りに主人から衣類万端与えられ、小遣いをもらって親許へ帰ります。この時期はまた他家に嫁いだ女性が実家に戻ることの出来る時期でもあり、自分と自分の家（先祖のルーツ）の繋がりを確認する大切な行事でありました。そんな藪入りと、仏教のお盆が結びついて現代に伝えられているわけです。

日本のお盆行事は、家族や一族が集まり、故人の思い出を語り合うなどしてご先祖様を供養し、亡くなられた方を偲ぶ行事として大変に意義ある素晴らしい風習であったものと思います。しかし現代では、娑婆の状況も様変わりして、帰省という名の家族旅行に出かける親子の姿が多く見受けられるようになりました。

★【心を省みる『お盆』の由来】

祭祀というものが伝承されるには、伝承されるだけの理由が隠されているものです。ところで、私達には馴染み深いお盆の行事ですが、先人達は『**お盆**』を通して私達に何を教え示されているのでしょうか？シッカリとお応えになられる方は、果たしてどのくらいおられるでしょう？読者の皆様には是非この機会にお盆の由来についてご理解頂きたいと思います。

お盆という言葉は正式には「**盂蘭盆**（うらぼん）」と言い、その盂蘭盆が略されて「**お盆**」と称されています。地方によっては「盆会（ぼんえ）・魂祭（たままつり）・歓喜会（かんぎえ）」とも言う。

お盆の由来は、今から約二千年前、中国の仏教僧侶だった**竺法護（じくほうご）**が訳したとされる「**仏説盂蘭盆経**」という仏書です。その中にある「**目連救母説話（もくれんくもせつわ）**」が典拠になったとされます。お釈迦さまの高弟の一人**目連尊者（もくれんそんじゃ）**と母・**青提女（しょうだいにょ）**の物語です。

★【地獄の苦しみを救う供養の心】

お釈迦様十大弟子の一人に数えられる目連は、「神通第一」と呼ばれるほど神通力（何でも見通す事の出来る力）に長けていました。その力は人々の為に活かされ、多くの人々から尊敬されました。ある夏の暑い日のことです。木陰で休んでいる目連の前を楽しそうに話しながら母子が通っていきました。その姿に、何年も前に亡くなってしまった母親を思い出した目連は、神通力の一つ天眼を利して会いに行くことにしました。

「あのやさしかったお母さん、今はいずこに・・」探し探す間に地獄の入り口にたどり着いた目連は「まさか」と思いながら入ってみました。焦熱地獄を覗いた時です、そこに横たわっているのはお母さんではありませんか。目連に駆け寄る母親は一杯の水を頼みました。しかし飲む水も食べる物も炎に化わり、母親は大火傷をしながら、飲むことも食べることもできず、痩せおとろえ餓鬼の世界で堪え難き苦しみを受け続けておりました。

目連は自分一人の力ではどうしても母親を救い出す事が出来ず、大泣、悲号する目連は藁をも掴む思いで、お釈迦様に事の子細を話しました。

するとお釈迦様は「**目連よ、母を救うには多くの僧たちの力に頼むしかないのだ。そこで七月十五日（八月に行う地方も多い）は雨期も上がり僧侶も夏の修行に一段落付く日（夏安居＝げあんご）である。人々も町に出てくる。この人達に母親の出来なかった百味の飲食を施しなさい**」と示された。

目連は教えの通り布思考を実行すると、餓鬼の世界で悶え苦しんでいた母親が天上界へと生まれ変わることが出来たのです。施しを受けた僧侶や町の人々、そして母親が救われた姿を目の当たりにした目連らが、踊りによってそれぞれの歓喜を表現された。これが**盆踊りの由来**となりました。

★【我が子を想う母親の執着】

ここまでお盆の由来自体のご説明を記してきましたが、これはあくまでも由来です。目連と母親の由来を通じて、実はここからが本当の意味で思索を深めなければならない教えが隠されているものと思います。

そもそも、青提女はどういう理由で地獄の世界に堕ちてしまったのか？

目連の母親は我が子を溺愛するあまり、他人に対して卑しい態度をしていたのです。夏のある日、目連の家の前を通りかかった人が、一杯の水を恵んでくれるように懇願されました。インドは暑く、特に水はどこにでもあるというわけではありません。水瓶の水は溢れんばかりでしたが、青提女は蓋を取ろうとしません。何度も乞う声に母親は「**この水は目連の水**」と言い放ち分け与えませんでした。お釈迦様は布施（物を施すこと）は執着心を離れることとして奨励されていますが、皮肉なことに我が子・目連を溺愛する心が、他への施しを忘れ、道理を見失った母親は、地獄の世界に堕ちてしまったのでした。

青提女は息子を心から愛し、家庭の裕福で、理想の良き母でした。しかし理不尽に感じられるかもしれませんが、目連を愛しすぎたがゆえに「**慳貪（けんどん）**」という罪を犯したのでした。**慳貪とは**・・ケチで物惜しみが強い心を指し、仏教では救いがたい人間の悪心とされています。**我が子の出世だけを考え、他人への施しを忘れ、青提女は人としての道理を見失ってしまったというわけです。**

★【善行のつもりが慳貪の罪】

自分本位な「慳貪の罪」を犯してしまうのは、私達も同じではないでしょうか？たとえ自分は善い事だと想っている行いでも、自信過剰や自己中心的なエゴに基づいたものならば、とても善行とは言えません。まさに青提女は私達が陥りやすい人間のエゴという姿の象徴なのではないでしょうか？

お盆という行事を通して、現在の自分はエゴイスティック（利己的・自分本位）な考えに陥ってはいないか？善いと思って行う自分の姿は、本当に間違っていないか？そんな自分の生き方を振り返りましょうというメッセージが込められているようにも思います。

先祖供養の日である盂蘭盆を機に、自らを省みて内省する生き方を心掛けたいものです。

合掌　副住職　谷川寛敬

「音の華」

ピアノ教室合同発表会

（グループアパショナータ）

と　き…八月十七日（日）
　　午後一時～

場　所…北日本新聞社ホール

谷川天花が、今旬の「アナと雪の女王」を弾きます。

上手く弾けるでしょうか？

お時間許せばお出かけください。

高木結夢も発表予定です。

♪　生　徒　募　集　中

（魚津・富山教室）

♪　伴奏も致します